

公立の小・中学校の不登校・不適応における生徒指導の課題

－外国人児童生徒の困難な体験からの考察－

Public Elementary and Junior high school guidance tasks for students truant and school maladaptation cases

A Study based on Immigrant Students' difficult Experiences

オチャンテ 村井 ロサ メルセデス

Rosa Mercedes Ochante Muray

要旨 (Abstract)

外国のルーツを持つ子どもたち、いわゆる移民の二世世代が日本の公立の小・中学校に通い、その数が年々増える傾向にある。乳幼児で来日している場合や、日本生まれの子ども達が多いが、各家庭では、親の話している言語や文化の下で育っていくため、日本の公立学校に通うことになると適応の問題や言葉の問題が現れる。公立学校に通い、問題なく学校生活を送り、高校や大学へと進学しているケースが徐々に増えているが、未だに学校においてなんらかの困難を体験している者は少なくない。本稿ではそうしたケースを考察しながら、不登校や、不適応に繋がる要因を調べ、その原因を分析する。また他の研究に関わった成功の事例と照らし合わせ、生徒指導の課題について考える。

キーワード：(外国人児童生徒) (不登校) (不適応) (生徒指導) (異文化理解)

I. 研究目的

デカセギ現象が始まってから、また出入国管理法が改定された1990年から25年以上経過している。20代、30代で来日した日系ブラジル・ペルー人は、現在50代、60代前後で中には子どもや孫もおり三世代で日本に生活している。リーマンショックという経済危機を乗り越え、滞在し続けた者の多くが、永住権を取り、家を購入するなど、日本に留まる意思が固くなってきている。このことから「デカセギ」と呼ばれていた彼らは移民者へと変わりつつあると言える。

そのような中、日本生まれの子どもたちや、学齢期の途中で来日した子どもたちが日本の公立学校に通い、日本の子どもたちと同じ教育を受けることとなるが、文化の違いによる適応の問題や言葉の壁などがあり、様々な困難を乗り越えながら、学校生活を送っている。90年代や2000年代には適応できず、中学校をドロップアウトするケースや、中学校を卒業後就職するケースが多かったが、現在高校に進学する意識が高くなり、肯定的になってきている(オチャンテ2014)。さらに大学に進学して、日本の企業で活躍する者も少しずつ増えてきている。しかし未だに不就学の子どもたちや、学校に適応できず学校を離れたり、進学を諦めたりする子どもたちは少なくない。

本研究では小・中学校における外国人児童生徒の困難な体験を考察しながら、不登校や中途退学に繋がる要因は

何なのかを調べ、不登校や退学に至った原因、影響を検証する。また、学校での生徒指導、家庭環境、貧困、文化の違いなどの要因を探って、外国人児童生徒の今後への生徒指導や支援のあり方を検討する。彼らの背景を理解しながら、安心できる学校生活を送るための必要な配慮やサポートを考えていくこととする。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査概要

三重県で2014年12月から2016年3月にかけて行った。

インタビューを行った主な場所は、飲食店や教会等である。またフィールドワークとして、2011年から2016年3月までに「外国人児童生徒巡回相談員」として小・中学校で出会ってきたケースについても述べることとする。

2. 調査対象者

不登校・不適應などのなんらかの困難を体験している日系ペルー・ブラジル人の若者、16歳から33歳、そしてペルー国籍の母親3人に調査を行った。他の研究のために行った聞き取り調査の事例も比較のために利用する。また今まで学校や教会で関わった小・中・高校生の体験から見えてきた課題も加えている。

表1 調査対象者

事例	性別	国籍	年齢	来日年	職業	最終学歴	将来の夢
A	男	ペルー	20	日本生まれ	非正規雇用	高校中退	パソコン・情報化の勉強の資格を取る
B	女	ペルー	16	11ヶ月	学生	高1	大学で英語の勉強
C	男	ブラジル	33	12歳	行政書士	大学	——
D	女	〃	17	日本生まれ	無職	高校中退	色々な外国語を覚える
E	男	ペルー	18	2009年	学生	高3	アパレル販売に就職が決まった
F	女	〃	50代	1991年	製造業	中等教育	——
G	女	〃	50代	1991年	派遣通訳	大学	——

3. インタビュー項目

外国人生徒の不登校や退学などの困難な体験の課題に重点を置いているため、彼らを取り巻く学校、家庭環境や不登校、退学の理由についてなど半構造化された質問を行った。

1) 実施状況

インタビューでは、16歳から33歳の若者7人、そして子どもが不登校・退学を経験している母親3人に30分から90分間に渡って、聞き取り調査を行った。対象者の国籍はペルーまたはブラジルである。若者に対するほとんどの調査は日本語で行ったが、母国語の方が説明しやすい時は、スペイン語、ポルトガル語で実施した。母親3人にはスペイン語で実施した。インタビューの引用箇所は四角い枠に表記し、筆者の質問の部分は斜体で、省略している内容は・・・で表記している。スペイン語とポルトガル語で行ったインタビューのプロトコルを筆者が翻訳して日本語で記している。

Ⅲ. 考察

インタビュー調査から、不登校や不適応に繋がる要因として次の5つが浮かび上がった。それは、「学校と保護者間の非連携」、「居場所がないこと」、「いじめとその放置」、「文化の違い」、「親の労働環境」である。以下にインタビューを引用しながら、それぞれについて説明していく。

1. 学校と保護者間の非連携

不登校については、学校と保護者間の非連携という課題が挙げられる。高校を退学したAさんの語りでは、中学校の3年生の夏休みを挟んで3ヶ月間学校を欠席した。学校では友達もなく、授業の内容も分からないことから不登校になった経験を次のように語った。

最初は毎日行っていました。でもその後欠席するようになった。学校に行きたくなかった。・・・3年の時、4ヶ月も欠席した。面白くなかった。ここにいたくないと思った。それは学校ですか。日本ですか。日本。学校は大丈夫だったけど、話す人がいなかったのが嫌だった。先生からの手伝いがあったけれど、頑張ろうと思えるほどではなかった。2、3時間取り出しがあったけれど、その後はずっと日本人と一緒にいて、あまり話ができなかった。学校に行かないときは何をしていた。ずっと遊んでいました。親は何も言わなかったの？彼らはずっと働いていた。7時に出て、(夜の)8時か9時に戻っていたので学校から電話があった日まで気づいていなかった。でないと気づかなかっただろう。

両親は遅くまで仕事をしていて、彼が休んでいることを知らなかった。親が学校からその状況を聞いて、母親が早く帰宅するようになってから、彼が学校に戻るようになったと語った。

アメリカの少年司法と非行防止局の不登校予防の研究(2010)では、不登校の要因の一つとして「欠席を両親/保護者に通知されない」ことが述べられている。外国籍の保護者の場合、言葉の問題や残業で夜遅くまで家にいないこともあり、学校と連絡が取りにくい場合が多い。また保護者の労働環境を見ると非正規雇用で時給制であり、残業がある時期と仕事が減る時期があるため、帰宅時間は一定ではない。中には残業をしないと解雇するという派遣会社もあり、遅い帰宅が続く時もある。そのため、保護者と教師の連絡が上手く取れないこともあり、生活環境を考慮しながら、そのニーズを把握する必要があるのではないかと示唆された。それ故に学校と保護者との繋がりがより不可欠である。学校と家庭が子どもの情報を共有していれば、不登校や退学防止に繋がるのではないかと考える。

通訳の手配ができず、教師と保護者の中でのミスマコミュニケーションが生じ、保護者と教師の信頼関係を失う危険性もある。教師と保護者との言葉の壁は大きな要因にはなるが、学校だけで対応するのではなく、役所やNPO団体、ボランティアなどとの連携を持ちながら子どもたちをサポートしていく必要があるのではないかと考えられる。

2. 居場所がないこと

また、不登校の要因として、居場所がないことが挙げられる。現在高校に進学しているBさんの語りでは、

クラブの皆とは仲良くしていたけど、クラスにいづらかった。小6でいじめに合って、居場所がなく、中学校ではいじめを引きずって疎外感を感じるようになった。何か悪口を言われているような感じがしました。

【中略】小学校でいじめにあってから、日本人とどう接していったらいいのか、本当に思っていることを話していいのか悩む。

現在では高校へ通い、他の外国にルーツを持つ同級生がいるため、仲間を作っている。日本生まれで日本語を流暢に話すが、「日本人とどう接していったらいいのか、本当に思っていることを話していいのか悩む」と学級での不適応な体験から不安な様子が伺える。またAさんの語りでは、

授業中ではよく寝ていました。しかし先生が何も言わなかった。関心はなかった。取り出し授業では、日本語の勉強をしていたし、先生と話したり、真面目に受けていました。

取り出し授業では勉強していたけれど、学級ではあまり関心はなかったの？何故？

理解できなかったから。そして先生も説明しようとも努力しなかった。

この語りでは、「取り出し授業ではちゃんと勉強はしていたけれど、授業中ではよく寝ていたことや、先生が何も言わなかった。」ことが伺える。そのことから教員が自分に無関心であると感じるようになり、学習意欲も失われたと語った。

学習が困難な生徒に、教室の中でできる小さな支援、ルビふり、声かけ等を行い、学級の一員としての所属感を持たせ、仲間作りを支援することで、学習意欲を向上することができるのではないかと考えられる事例がある。対象者のCさんは自分の体験をこう語った。

同じ中学校にいた従兄弟はドロップアウトしたけれど、自分のクラスの担任の先生が、教室で自分を受け入れるために様々なグループ活動を行ったり全体で支える仕組みを作ったりしてくれたため、中学校生活を楽しく過ごした。

その後高校と大学に進学することができた成功した事例である。所属感を持たせ、仲間作りを支援することで、学習意欲を向上することができるのではないかと考えられる。

Dさんの語りでは、小学校で天然パーマのことでいじめに合っていた話をして、

学校の先生は見て見ぬふり。話しても変わらないから。話したことあった？話したことがあるけど、信用しないからいいわ。【中略】中2の頃の先生が、（問題があった）ママを呼んで話しをして、先生の前ではわかりましたとは言うけど、家ではまた怒られたり・・・ずっと大人嫌いだったけど、中2の時の先生が真剣に向き合ってくれたのははじめてだったので・・・みんなみんな一緒じゃないと、信頼できる人もいるんだと思った。

「先生の中にも信頼できる人もいるんだ」とこの体験を通して教員を見る目が変わったそう。信頼できる教員がいることが学校や教室での居場所作りに繋がった例である。

3. いじめとその放置

もう一つの要因としていじめが挙げられる。対象者のEさんは自分の体験についてこう語った。

小学校と中学校でいじめ、最初は皆は珍しいから近寄るんだけど、時間が経っていくと私を無視するように

なって、うざい、きもいなどと言われました。その時、学校に行くのが嫌になって、週に2回ペースに休んでいました。自殺も考えました。生きている意味ないと思って。・・・今思うともっとじっとするべきだった。友達を作ろうと必死に皆に声をかけしたりして、それで気持ち悪いと思われていたのかな。

高校生になっている対象者は、高校ではいじめに合わず楽しい学校生活を送っているが、当時の自分の態度は文化の違いから他の同級生に嫌われていたのではと考えているようだ。

また上記で挙げたDさんの事例でも、

天パは嫌だった。一人だけみんなと違うから、みんなと違うということに偏見されて、小4では一番ひどかった。からかわれたり、殴られたり、ブラジルに帰れとも言われて、自殺しようと思った。コンプレックスがあって。親とも悩みがあったから。それが重なった。

筆者は対象者Eさんの「最初は皆は珍しいから近寄るんだ、時間が経っていくと私を無視するようになって」とDさん「一人だけみんなと違うから、みんなと違うということに偏見されて」の体験を、他の外国にルーツを持つ子どもたちから良く聞く体験である。これは、学校の中での偏見や差別除去への課題を指摘しているのではないか。

また母親Fさんは子どもが小学校からいじめにあった体験を次のように語る。

小学校からいじめで暴力にあって、でも学校は何もしなかった。反対の場合だと、外国籍の子ども3人が1人の日本人に暴力をふった場合、対応が違っていただろう。その後、家を購入して学校を転校することになった。転校した小学校では特に問題はなかった。【中略】中学校ではまたいじめにあって、相手の子が家に勝手に入ったり、冷蔵庫を開けて中のアイスクリームを食べたりしていることを下の子どもから聞いて、学校に行きました。しかし相手の親を呼んだりとか何もしなかった。下の子どもが何か悪い行動をとったときに、相手側の両親に会い、謝りに行くことがあったけれど、逆の立場ではそんなことはなかったので不公平だと思った。

フィールドワークで筆者が関わった事例では、外国人児童生徒が同級生に何度も「国に帰れ」と言われ、ストレスとショックから入院することになった。保護者を呼んで問題の説明はしたけれど、相手の保護者との面会はなかった。相手の保護者と話したいと外国籍の親が頼んだことで、学校側がその時間を設定して、子どもが傷ついたことを報告し、相手側の親も謝り、お互いの気持ちを伝え合う時間を設けられて問題を解決できた例がある。

また娘が不登校になった母親Gさんの体験を見てみよう。

中3の2学期、お腹がいたいから休みたいと言うようになった。彼女はあまり休んだりしていなかったから。夜中に泣いていることがあって、理由を話したがらなかったけれど、よく聞くと、3年生の部活が終わった後、仲良くしていた女の子たちと、サッカーするようになって。(サッカー) 苦手だったからずっと練習していた。でチームになって、ある日、試合を負けたのは彼女のせいだと(配布物を)あつめる担当だった彼女がそのコメントを見て傷ついて、Lineを通して、攻められる内容が送られたり、教室で仲間はずれにされたりで、学校に行きづらくなっていた。私は何をしたらいいのか分からなくて、仕事を休んで一緒にいる時間を増やしていました。「明日は必ず行く」と言っていたけれど、行かなかったりした。・・・学校は何もしなかった。担任の先生も若い先生で、皆のこと好きみたいな先生で、娘のために何もしなかった。

【中略】3年生で受験の書類を書くために学校に行ったりしていたけど、ほとんど休んでいました。良い雰囲気です。卒業できなくて残念。高校入試は、先生はぎりぎりだとか、欠席が多いから難しいと言っていたけど、それまで真面目で、成績も上位だったので、希望の高校に進学することができました。・・・今は頑張って高校に言っているけれど、早退する時があったり、週に1回ほど休む時もあります。

上記の事例からみると、適切な対応がされていないため、不登校に繋がったのではないかと考えられる。母親Fさんと母親Gさんの語りでは共通としているのは、学校の不適切な対応である。「学校は何もしなかった」、または日本人の子どもの場合だと対応が違ってたなどの不公平を訴えている。

いじめは深刻な問題であり、ニュースやコミュニティのネットワーク内では取り上げられることが多く、外国籍保護者も敏感になることが多い。そのため、問題が起こった場合は、保護者に素早く伝え、対応を示すことで、安心感を与えることができるのではないかと考えられる。

いじめは外国人児童生徒に限る問題ではなく、日本社会において重大な問題となっている。場合によっては学校だけで対応するのは限界があると考えられる。そのため、学校、教育委員会、NPO、警察などの連携が必要不可欠になる。

4. 文化や家庭環境の違い

外国人児童生徒の中では、日本生まれの子どもたちが多いが、家庭では親の話す言語を使ったり、親の文化を受け継ぎながら育ってきている。生活環境が異なることで、児童生徒の学校生活には大きく影響する要因があるだろう。ここでは、学校現場を通して見えてきた課題を挙げることにする。

まず、親の通訳について述べる。多くの子どもたちが親より日本語が堪能であるため、親の支援者として病院の通訳や市役所や銀行などの事務的な手続きの時一緒に行って通訳している。親の通訳をすることで、彼らにも自信が付き、好んで通訳をする子どもが多い。

しかし、中には、通訳のために学校を頻繁に休み、学習に遅れることもある。家族だけではなく、親戚が通訳を必要としているとき、日本語ができる彼らが支援に回ることが多い。筆者が関わった生徒の中では「おじさんが手術する時にその通訳に病院へ行くためや、弟の通院の通訳に行くため」など頻繁に欠席していた。通訳は午前中で終わっても、一日学校を休むことになり、次第に学校休むことの楽しさを覚え、率先して通訳の手伝いをしていた。しかし、休むたびに学級での居場所を失ったり、学習の遅れにも影響していた。外国人のコミュニティが集中している都市の市役所の多くはスペイン語・ポルトガル語・中国語の通訳できる職員がいることが多いが、病院では通訳を自分で探さなければならない。病院側は明らかに学齢期の者が通訳に来ていると気づく場合、大人の通訳者を推薦するか断るべきではないかと思う。集中都市の大きな病院では、電話による通訳の手配など、NPOと連携してサービスをしているが、そのような支援が広がると、通訳のために学校を欠席する子どもが減るのではないかと思う。

また兄弟の面倒を見ることが多い。外国籍児童生徒の兄弟がいる家庭や、母子家庭のため、親の代わりに弟、妹の面倒を見たり、掃除や家事をする生徒もいる。また兄弟が病気の時、親が仕事に行き、上の子どもが下の子どもの世話するために学校を休むこともある。下の子が病気がちで母親が頻繁に休めない場合、よく弟妹の面倒のため学校を休む子どもを見てきた。仕事を頻繁に休むと解雇になる可能性があることや、母子家庭で他に支える者がいない場合、生活費を稼ぐために親が取る一つの戦略である。

さらに、学校の現場でよく見られるのが、クラブ中退である。上記で挙げたように、家族を支援することは、南米の家庭ではごく自然な行為であり、多くの子どもたちが通訳や兄弟の面倒や家の掃除を任せられたりしている。しかしこのことを教員が認識していても、同級生が知らないことが多く、勝手に休んでいるまたはあまいと勘違いする者が多い。中には、サッカーやスポーツですぐに溶け込み、卒業までに部活動をし、その達成感を感じる生徒もいるが、同級生とうまくいかないことや、家庭の事情のため土日の練習試合には出られないことから途中で部活動をやめる生徒は少なくない。

南米の学校では、放課後の部活動文化はなく、学校では勉強をして、放課後はすぐに家に戻るのが一般的である。そのため、放課後遅くまで残る、また週末練習のために学校に出る習慣はないことも影響しているだろう。

5. 親の労働について

彼らの親の多くは非正規雇用で3か月から6か月の労働契約の下で働いているため、非常に不安定な立場に置かれている。また会社では、日本人のリーダーともめたり、日本語がわからないため怒られたりすることを聞き取り調査やコミュニティ内ネットワークではよく聞く。「あの会社の日本人のおばあさんが怖い」といった話や、「日本語をわからないなら、何で日本にいるの」と言われたという話をすることもある。そうしたストレスを抱えている保護者は少なくない。家においての日常的な会話で「会社の日本人にこう言われた、こうされた」と語り、それを子どもたちは耳にしながら、学校生活を送ることになる。そのため、子どもたち自身も日本人は厳しい、怖いという否定的で反抗的な考え方を持つことに繋がるのではないかと思う。逆に母国での楽しい思い出や懐かしい思い出話を聞きながら、行ったことのない、また知らない保護者の母国に憧れ、関心抱くこともあるだろう。

保護者は自分たちも会社で差別などを受けながら生活していると、子どもたちは学校ではいじめにあっていないかと心配し、学校で問題があると、マイノリティ状態にある子どもを過剰にかばったり、過保護になる親もいる。中には、子どもが学校に行くのがしんどいという、それを簡単に許す保護者もいる。筆者が見てきた事例では、休み明けの月曜日を良く休んだり、遅刻する事例が多く見てきた。それを保護者に訴えると「かわいそうだから」、または、保護者も仕事の疲れで、一緒に休んだりしていたと語ったものもいた。

保護者の労働環境も子どもたちの学校生活に大きく影響している。親が解雇になると、別な仕事を探し、引っ越しをせざるを得ない例もある。すると子どもたちも慣れていた環境を離れ、新たな付き合いをゼロからスタートをしなければならない。このことから学習の遅れが生じ、慣れないことから、学校を頻繁に休んだり、不登校、不就学になる危険性は少なくない。外国人の保護者の労働環境について担任の先生や学校がおおよそのことを理解していると、それらに配慮しながら、外国籍の子ども達や保護者とのより良いコミュニケーションをとることができるのではないかと考えられる。

6. 必要な配慮やサポート

これまで様々な問題点について述べて、必要な支援や配慮を挙げた。ここでは、上記の点に加えて小・中学校で必要なサポートとして次のような点を挙げることにする。

学級での居場所がないと感じる理由として、勉強についていけないという事例を見てきた。そのため、外国人児童生徒には基礎的な日本語力を身に付けると共に、各教科の勉強のサポートもする必要があるのではないかと考えられる。日常会話が流暢にできても、学習言語は身についていないケースが多い。そのため、教科書を読み取ることや、国語、社会のような科目で教師の説明を理解し、ついていくのが難しい場合もある。

また、多様なロールモデルと身近な交流の場を持たせることも重要であると考えられる。そのような体験を通して、自分に自信を持ち、多様な夢を描くことに繋げられるであろう。

上記でも触れたが、気軽に相談できる場として、学校によってそれは国際教室や保健室、相談室になるかもしれない。そして国際担当の先生、養護の先生、スクールカウンセラー等は、信頼の置ける相談相手になりうる。学校全体や市役所、市の教育委員会やNPOとの連携を強化し、必要なサポートや配慮を考え実践することが重要であるとする。

IV. 生徒指導の課題

上記では不登校に繋がる要因を見てきた。今まで述べた事例を通して、生徒指導の課題について考えて行くこととする。まず、調査対象者6人全員がいじめを体験していることを報告している。マイノリティ状態にある彼らは内面的に様々な悩みを抱えている。そのため、担任の先生、養護の先生、スクールカウンセラー、支援員などの連携が必要となってくる。中には真面目でおとなしい子どもだから、大丈夫と思われる場合もあるが、問題行動がないからと言って学級に馴染んでいるとは限らない。また居場所がないから不登校に繋がった事例を見てきた。生徒指導提要（文部科学省2010）では、「不登校の児童生徒にとっても居心地のいい学校」は「すべての児童生徒にとって居心地のいい学校」という視点をとっているが、これは、「外国人児童生徒が安心できる場づくりは、日本人の子どもにとっても安心できる場である。」という意味にも捉えることができるのではないかと思う。国籍を問わず、全ての子ども達が楽しい学校生活を送ることができるように、学校全体としてさらに目指して、そのために必要な支援や対策を考える必要がある。

また、生徒指導を行う際に、生徒個人はもちろん、その家族の背景とコンテキストの中で子どもを見なければならぬと考える。上記では文化や家庭環境の違いや彼らの保護者の置かれている不安定な労働環境を見てきた。特別扱いをするということではなく、今必要としている支援を与えることが重要である。大人になった彼らもまた、日本社会の将来を担っていく者となるのだから、彼らの環境を理解し、配慮すべきところを学校全体で考え、支えていく必要があるのではないか。

また、異文化理解の研修の機会を増やすことは意識をつけるために重要であるのではないかと考えられる。国際教室担当の教師だけでなく、学校全体の取り組みとして、外国人児童生徒が教室や学校にいたことがプラスであると受けとれる意識を育てる必要がある。

様々な国籍の外国人児童生徒が増えていく今後は、生徒指導を行う際に、異文化理解、国際理解の要素を入れていく必要があるのではないかと示唆される。

V. おわりに

上記で挙げたように、調査の対象となった若者のすべてがいじめを体験している。そのうち3人は、自殺も考えたことが伺えた。筆者は今まで、高校や大学に進学した若者のいわゆる成功した事例を取り上げることが多く、お願いすると調査を快く受け入れてくれることが多かった。しかし今回、調査を受けたくないと断られることが多く、挫折体験やいじめという苦しい体験が整理ができず、未だに心の傷になっているのではないかと思う。しかし、彼らの事例や語りを通して、現在小・中学校に通っている同じような体験しているかもしれない子どもたちの助けとなるヒントが得られるかもしれない。やまだ（2000）によれば、「先に生きた人々の人生の物語が、次に生きるものの人生のモデルになる」と指摘している。彼らの体験から学び、一人でも多くの子どもたちが安心できる学校生活

を送ることを願っている。今後、対象者の人数を増やし、継続調査していく予定である。

本稿では、小・中学校での事例のみ扱ったが、今後の課題として高校に進学できたにも関わらず途中退学したケースの分析も必要であろう。退学の要因を分析することによって、問題点を把握し、中退を予防するヒントを得ることも重要である。

今まで取り上げた事例は、ペルー・ブラジル等の外国籍児童生徒に限る問題ではないと思われる。国籍にかかわらず、教室の中でマイノリティ状態の子ども達には一層のケアが必要である。彼/彼女らも、日本の将来を担っていく者となるからである。

【参考文献 (References)】

伊勢真理絵 中野靖彦 不登校支援の現状と展望 愛知淑徳大学論集. 教育学研究科篇 4, 15-27, 2014-03-18

宮島喬 外国人の子どもの教育: 就学の現状と教育を受ける権利 東京大学出版会 2014

西山教行、細川英雄、大木充 「異文化間教育とは何か ―グローバル人材育成のために」(リテラシーズ叢書4) くろしお出版 2015

オチャンテ 村井 ロサ メルセデス「ニューカマーの子どもたちの義務教育後の進路選択と将来の展望」梶田叡一 『教育フォーラム54 各教科等の学習を支える言語活動 言葉の力をどう用いるか』金子書房、2014年8月 pp.118-126

Suggested Reference: Development Services Group, Inc. 2010. "Truancy Prevention." Literature Review. Washington, DC.: Office of Juvenile Justice and Delinquency Prevention. http://www.ojjdp.gov/mpg/litreviews/Truancy_Prevention.pdf

やまだようこ編「人生を物語る」ミネルバ書房 2000

文部科学省 生徒指導提要 教育図書株式会社 2010